
蒼き王の譚歌

若山 かおり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼き王の譚歌

【Nコード】

N0116T

【作者名】

若山 かおり

【あらすじ】

革命を起こすべく將軍の指示により単身、王の居室にやってきたヒューイアス。そこには歡喜に満ちた王がいた。

桜庭春人さん主催の企画『candy store』出品作品です。

- ・各回ごとに設定されたお題のお菓子を作品内に登場させる
- ・一話につき2000～4000文字

・ジャンルは自由

本作は『第3回 クッキー』です。

その男は澄んだ水面のような蒼い瞳でヒューイアスを見返した。
「私の首を討ちに來たんだろう?」

輝く銀の髪に豪華な黄金の王冠を戴いた、この国の王。

「君を待っていた」

相貌に浮かび上がるのは至上の歡喜。穏やかな声色は子守唄のよう
に柔らかだ。

何故、と思った。

何故、この男はこの場において、これほどまでの喜びに満ちている
のだろう。

城外では乱戦が続いている。最後まで王を守り続ける近衛隊と、
ミューレン將軍率いる革命軍の激しい剣戟の響きが聞こえる。

だがしかし――。

この部屋の中だけは静謐な空氣に包まれていた。

王宮の侍女だった母が遺した地図。それに記された隠し通路を通
り、ヒューイアスは単身この王の居室に來た。それがミューレン將
軍の指示だった。

目の前のこの男を斃せば、革命は成る。

王と対峙した瞬間に、右手にした剣を振り下ろすつもりであつた。
だが、微笑みを浮かべる王の姿に一步、後ずさつた。

幼い頃に流行り病で母を亡くしたヒューイアスは孤兒院で育つた。
親のいない子供など、この国では珍しくない。母を覚えているだけ
ヒューイアスは良い方だ。彼を慕い、ついて回るシルティアなどは
両親を知らない。

「ヒューイ兄ちゃん、私のパパとママはどこにいるの?」

小さな手でクッキーの生地を丸めながら、シルティアは尋ねた。

このクッキーは孤児院の生計の一部を担っている。彼女は小さくても立派な働き手だった。もちろん五歳年長のヒューイアスは、畑仕事もすれば家畜の世話もする。

ヒューイアスは返答に詰まった。シルティアは捨て子だった。

彼女が何故そんなことを尋ねるのか、彼には心当たりがあった。

シスター修道女のお使いと一緒に市場に行つたとき、彼女と同じくらいの年頃の子供を見かけた。子供は右手を父親、左手を母親と繋いでいた。そして「せーの！」という掛け声と共に両親は子供を持ち上げ、子供は高く飛び跳ねる。声を上げて楽しそうに笑った——よくある他愛のない光景だ。

シルティアは、ヒューイアスと繋いでいた右手をぎゅっと強く握りしめた。少し湿った温かさが、彼の心に氷のように突き刺さった。彼女の左手には、小さな買物袋が握られていた。

—— 黙り込んでしまったヒューイアスの蒼い瞳を、シルティアが首を傾げて覗き込む。

「……天国だよ」

ヒューイアスは丸めた生地をばんばんと叩き、平らにして天板に並べた。それは隣のクッキーより明らかに大きく薄くなっていた。ぎゅっと握られたシルティアの手の中の生地は熱でバターが溶け出し、べとついていた。

「お前には俺という、格好いい兄ちゃんがいるだろ！」

ヒューイアスはシルティアの手から生地を取り上げ、その小さな体を抱き上げようとした。年長とはいえ彼だつてまだ十歳の子供だ。やっと彼女の足が浮く程度にしかない。けれど、市場で見かけた子供のように空高く飛ばせてあげたかった。

突然のことに驚きつつも、はしゃいで笑うシルティア。周りにいた他の子供たちも、わっと駆け寄り、次は自分の番だとせがんでくる。

「しゃーねーな、お前ら一列に並べー！」

シスター様子を見に来た修道女に叱られるまで、その騒ぎは続いた。

この国は不平等だと思った。
王族が、貴族が、特権階級の者だけが、明日も同じように日が昇ると信じて暮らせる。
古くからこの国はそうだった。この体制を誰かが変えねば。そう、思った。

十五の歳を迎え、ヒューイアスは孤児院を出た。
彼は下級兵士になった。孤児院出身の子供が就ける職など限られている。

けれど、理由はそれだけではない。
幼き日に遺された母の言葉があつたから。

「お前がこの国を憂えたなら——王を討ちなさい」
王族しか知りえないような隠し通路が記された、詳細な王宮の地図。

この存在を初めて他人に打ち明けたのは、訓練を見物に来たミューレン将軍に名を訊かれたとき——。

「ヒューイアス」

その名にミューレン将軍は太い眉をぴくりとさせた。そして、あとで私室に来るように小声で言われた。

王の信頼がもっとも篤い^{あつ}と言われるミューレン将軍の口から革命の文字が出たのは、衝撃だった。

「俺を貴方の配下にお加え下さい」

ヒューイアスは膝を折り、銀色の頭を深々と下げた。

そして——。

？時は満ちた？とミューレン将軍は関の声を上げた。

王は一步、ヒューイアスへ近づいた。

目の前にいるのは血涙を流す国民を顧みなかった、斃すべき王。

「待っていた、だと？ 逃げ場を失って気が狂ったか？」

言いながら、ヒューイアスは疑問に思った。逃げ場はあったではないか。自分が通ってきた隠し通路から脱出できたはずだ。

「^{きちが}気狂い、か。そうかも知れない」

口角を上げて王は笑った。清々しさすら感じられる王の声音に、ヒューイアスの剣を握る手がじつとりと汗ばむ。向かってくる敵なら、ためらいもなく斬ることができた。けれど帯剣もしていない王に気圧されていた。

王は静かに告げた。

「なにしろこの革命の首謀者は、ほかならぬ私だからね」

自分の耳を疑った。王の言葉が頭の中に沁み込むまでに長い時間を要した。

「なん、だと……？」

「ミューレンは本当によくやってくれた」

ヒューイアスは手にしていた剣を思わず取り落としそうになった。順調すぎる革命軍の侵攻。被害はいつも最小限だった。それはミューレン將軍の的確な判断の賜物だと信じていた。

ミューレン將軍は最後のこの作戦において、ヒューイアスが単独で王の居室に赴くように命じた。少数精鋭というなら分かるが、さすがに自分一人だけでというのは腑に落ちなかった。革命軍に身を投じたときから命など捨てている。だが、自分に万一のことがあれば革命が失敗に終わることを恐れた。だのにミューレン將軍は「お前がしくじったら正面突破するだけだ」と厳つい手でヒューイアスの肩を思い切り叩いただけだった。

——ここに辿り着くまでの間、ただの一人の兵士にも遭遇しなかった。

「何故、王が革命を企む！？」

「この国の王は熟れすぎた果実だ。芳しい実であるためには根となる国民が必要であることを忘れた。いまや朽ちて腐臭を撒き散らすだけの忌むべき存在だ。——私はこの実をもぎ取って、新たな種を植えたいと思う」

「俺は無学でね、小難しいことを言われても理解できない」

ヒューイアスは柄を握る手に力を込めた。

「君だつて気づいているだろう？ この国は滅亡の一途をたどっている。贅沢し放題の王族、腐敗した貴族、傲慢な特権階級の者たち……そして、国が傾いていくのを止められない無能な王。彼らには舞台から降りてもらふべきだ、そう思わないかい？」

「はっ！ そうさ。だから俺はお前を討ちに來た。だが俺が訊きたいののは、何故、王自身が……！」

「それが私の愛し方だよ。理解してくれなくていい。愛し方なんてそれぞれだ。——私にとって重要なのは、王を斃しに來た君は、幕を下ろす者だということだけだ」

王の瞳は穏やかな海の色をしていた。ヒューイアスはその深い色に飲み込まれていた。自分と同じ、蒼い瞳に。

「昔話をしよう。私には愛した女性がいた。私は彼女に革命を打ち明けていた。彼女は私を卑怯者だと言ったよ。私はもつと王として足掻くべきだと。彼女は私の良き理解者ではあつたけれど、決して賛同者ではなかった」

ヒューイアスは唾を飲んだ。王は何を言っている？

「彼女は侍女だった。私の子を身籠っていることが公になると彼女の身が危うくなる。だから王宮を出るように言った。彼女は辞するとき、一つの約束をくれた。私が足掻いても力が及ばなかったとき、救いをくれると。幕を下ろす者を遣わせてくれると」

母は、王に弄ばれて捨てられたのだと、ずっと信じていた。憎き男の仇をとって欲しいと願っていたのだと。

「は、ははは……。俺がやってきたことは何だつたんだ！ とんだ

茶番じゃねえかよ？」

かしやーん。

高い金属音が鳴り響いた。

ヒューイアスは剣を投げ捨て、頭を掻き毟る。

王が静かに近づいた。大きく頭を振り、ヒューイアスの肩を掴む。

「違うだろう？ 君は君の理想のために、私の前に現れた。君は君で、私とも彼女とも違う。——そうだろう？」

鎧を通して感じる王の手の重みに、よろけそうになる。

「君の手で私の首を落とし、そのバルコニーから掲げて欲しい。それで近衛隊の者たちも剣を鞘に収めるだろう。さあ……、これ以上、無駄な血が流れないうちに」

王は跪いた。軽く頭を垂れると、長い銀の髪がはらりと流れた。
「願わくば、君をこの手に抱きたかった……」

ヒューイアスは……一条の光を疾らせた。

——君は、どんな世界を望む？

誰もが、ヒューイアスを？革命の英雄？と謳った。

自分を讃える人々の波から抜け出し、やっと辿り着いた。

ヒューイアスは安堵の溜息をつきつつ、孤児院の扉に手をかける。子供たちはもう眠っているであろう。シルティアが一人、クツキーの袋詰めをしていた。彼女は昼間はパン屋に働きに行き、夜は子供たちの面倒を見ていた。

瞳一杯に涙を湛えながら駆け寄ってきたシルティアを、ヒューイ

アスは抱きしめた。

「シルティア……」

何を言ったらいいのだろう。何から言ったらいいのだろう。王さえ斃せば、それでいいのだと信じていた……。

彼女の背中に回した手が、小刻みに震えていた。

「ヒューイ……？」

不思議そうに小さく呟き、シルティアはヒューイアスの抱擁から抜け出した。愛しむように彼の手を取ると、自分の両手でそっと包み込む。彼女の温かさがゆっくりと心を満たしていった。

ああ、と思った。

空を掴むこの手を見ることが耐えられなかったただけなのだ。だから願った。

シルティアが、子供たちが、誰もが、淋しくないように……。

「——そんな世界を、俺は誓うよ」

ヒューイアスは身を屈めて、自分を包むぬくもりに優しく口付けした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0116t/>

蒼き王の譚歌

2011年7月23日03時27分発行